

福井県立図書館で「ふくい山の文学」深田久弥 桑原武夫 増永迪男の企画展が‘08-6-17~7-31 開催された 広島から 藤川昌寛、石橋満雄が ‘08-7-23~25 福井県立図書館往訪

主催者の趣旨・・・

山の文学として、最も知られているものの一つに、深田久弥の「日本百名山」がある。本著は日本中の山々から、山の品格・歴史・個性を基準に深田自身が百座選び、それぞれの山についての随筆をまとめたもので、福井県からは荒島岳が選ばれている。旧制中学時代を福井で過ごした深田は、一生登山に親しみ、山の文学作品を数多く残した。

桑原武夫は評論家・フランス文学者として知られる一方、登山家としても名を馳せた。三高山岳部時代より今西錦司、西堀栄三郎ら、後の山岳会を牽引していく人々とともに登山に打ち込み、54歳の時には京都大学学士山岳会の隊長として、パキスタンのチョゴリザ初登頂にも成功している。

現在、山岳エッセイストとして活躍する増永迪男は、13歳の時に経験した白山登山以来山に親しんでいる。34歳でアフガニスタンのヤジュン峯初登頂に成功してからは、より一層ふるさと福井の山に親しむようになり、福井の山についての文章を数多く発表するなど、戦後の福井の文学界で山の文学を展開し、独自の世界を構築した。

以上、福井にゆかりのある文学者3名によって書かれた山の文学作品をとおして（（ふくい山の文学））を見ていきたい・・・

この3者の中で増永迪男氏は広島大学山岳部では私の3年先輩で入学当初から教え込まれ以来半世紀、現在の信州にある広大山岳部山荘（鹿島クラブ）ライフを通して親交が続いている。

山岳エッセイスト 増永迪男氏まずなが みちお のプロフィールは
1933年（昭和8年）7月9日、福井市に生まれる。福井県立乾徳高等学校、広島大学工学部を卒業、1946年8月（当時13歳）の白山登山より山に親しみ現在に至る。福井市在住。
戦後の福井の文学界にあって、山の文学を展開し、山岳エッセイストとして独自の世界を構築した。1985年福井県文化芸術賞受賞、2000年福井県文化賞受賞。
著書に「霧の谷」「霧の谷Ⅱ」、共著作に「ヤジュン峯登頂」「日本百名峠」などがある。

「ふくい山の文学」の展示には 下記、増永迪男著書が並ぶ
○1：「霧の谷」1975年北陸通信社刊 2：「霧の谷Ⅱ」1976年北陸通信社刊 3：「日本海の見える山」1979年北陸通信社刊 4：「わが山・ふくいの詩」1982年福井新聞社刊（共著） 5：「取立山・しらやま考」1985年品川書店刊 6：「福井の山150」1989年ナカニシヤ出版刊 7：「霧の森～福井の山・四季～」1993年ナカニシヤ出版刊 8：「霧の山～続・福井の山・四季～」1995年ナカニシヤ出版刊 9：「ヤジュン峯登頂」1969年広島大学ヒンズークシュ遠征隊刊（共著） 10：「風景との出会い」2001年福井新聞社刊 11：「夜明けの霧の山」2007年福井新聞社刊

この中で1976年出版の「霧の谷Ⅱ」は、詩人・広部英一に指摘された「カケスの青い羽根」で増永文学が大きく変わったと言われる。「下書きから半分の分量にそぎおとして完成された本篇は、哀しみを超越した、深く澄んだ感動を与える。」と 評価された。

「カケスの青い羽根」は増永氏の妻道子さんが単独行で5月の八ヶ岳にて遭難死した、その捜索から発見まで（5/22～26）を描写している。道子さん（旧姓渡辺道子）は広島大学文学部国語学科卒、広大山岳部所属 彼女の恩師でもある広島大学名誉教授・野地潤也先生が、広島市竹屋公民館の文章教室で渡辺道子作の短編小説を、教材に使ったことがあった。それ位渡辺道子さんも文才がある人だった。

「霧の谷Ⅱ」を今回、また読み返してみた。「カケスの青い羽根」の中で、
・・・背負っている間に、妻の軀は死後硬直が次第に解けて柔らかくなった。両足に手を掛けて歩いていると、生身の人を背負っているように思うことがあった。
私は妻がいつかいった言葉を今一度思い出した「あなたが、私と山にいて本当に楽しいというのでなかったら、いやなの。いつも私のために調子を合わせてくれている。どうしてもそんな気がするのよ」そして、その言葉の本当の意味をその時まで私は感ずることができなかった。

「福井の山150」1989年ナカニシヤ出版刊 では

- ・ ・ ・よく晴れた日曜日に美濃平家（1450m）に登った。 ・ ・ ・しかし日差しを浴びて様ざまな緑に輝いている山の姿を眺めていると、私のこれまでのこの広い山の中での歩みが、山頂を目指す細い線に過ぎなかったことに、改めて気づかされるのだった。
- ・ 明日からでも歩いてみたい山や谷が、明るい光の中に数えきれないくらいに見えてくる。

今や国内で有名な国際温泉評論家・山本正隆氏（広大山岳部で増永迪男氏の1年後輩、藤川の2年先輩）が何年か前にヨーロッパ温泉旅行に増永迪男氏を誘った、

「今はまだ山に行ける体力があるので、山に行きます」

が増永迪男氏の回答でした

この山本正隆氏、増永さんが「カケスの青い羽根」のなかで八ヶ岳に搜索に出掛ける決心を決め、一番最初に連絡を取った人、現地・八ヶ岳に一番最初に来たひと、Mさんこと山本正隆氏のことである。

「ふくい山の文学」の展示会で増永迪男氏の61年に及ぶ山とのかかわり、生き様、何と、しっとりとした優しい心根を身に沁みて感じ、立派な先輩を持って誇りに思った。

又今回の（ふくい山の文学）企画展にちなみ、7月21日14:00から福井県立図書館で増永迪男氏の講演会があった、いす席を設けるくらい盛況だった由。同展示会場となりには増永氏が撮影した山の風景写真展も展示されていた。

23日、新築の二階建二世帯住宅・増永邸に一夜借りて 24日早朝増永氏に案内されて荒島岳を藤川、石橋は登った。山頂はハクサンフウロ、ウルップソウ、ハクサンボウフウなど、夏の高山植物が咲き乱れていた。

完